

第45回 福岡県地方史研究協議大会

福岡県の古代山城

主催 福岡県教育委員会
共催 福岡県地方史研究連絡協議会（福史連）
期日 平成23年6月25日（土）
会場 福岡県立図書館レクチャールーム（本館地下1階）
日程

13:00 開 会

◆館長あいさつ

◆福史連会長あいさつ

13:10 講 演（90分）

「七世紀の国土防衛

—古代山城の築城と背景—

講 師 小川 秀樹 氏

14:40 休 憩（10分）

14:50 講 演（60分）

「怡土城とその時代

—吉備真備とその人間模様—

講 師 瓜生 秀文 氏

15:50 質疑・応答

16:00 閉 会

講師プロフィール

◎ 小川 秀樹 氏

現 職	行橋市教育委員会 文化課長
専 門	日本考古学
研究テーマ	古代山城の諸問題 豊前地域の古代史
主な著作	「豊前・御所ヶ谷山城」(『古代文化』62巻第2号 2010年) 「日本の古代山城—最古の国土防衛網—」(『地図中心』453号 2010年) 「御所ヶ谷神籠石と七世紀の国防」(『行橋市史』上巻 行橋市 2006年) 「御所ヶ谷神籠石」(『城郭研究最前線』別冊歴史読本71 新人物往来社 1996年)

◎ 瓜生 秀文 氏

現 職	糸島市教育委員会 文化課 発掘調査係
専 門	日本古代史
研究テーマ	古代山城、中近世山城他
主な著作	『新修志摩町史』上巻 [古代と戦国時代を執筆担当] (志摩町 2009年) 「怡土城築城の経緯について」(『海路』4号 2007年) 「地名と神籠石論争の歴史」(『地名を歩く』別冊歴史読本81 新人物往来社 2004年) 「雷山神籠石」(『溝婁(コル)』9・10号 2001年)

【講演 1】

「七世紀の国土防衛—古代山城の築城と背景—」

行橋市教育委員会 小川 秀樹

古代山城のつくられた時代

7世紀、九州、畿内、瀬戸内海沿岸、九州の北部に 20 余りの山城が築城された。それまで、わが国に無かったこうした山城の築城は、東アジア世界の動向と密接に関係するものであった。

589 年、隋が中国を統一し、東アジア世界に再び大帝国が成立したことは周辺諸国に大きな影響をもたらした。百済、高句麗、新羅の朝鮮三国は相次いで隋に入貢し、隋を中心とする国際的な秩序の中に編入された。隋と高句麗はその後、関係が悪化し、度々、隋による高句麗侵攻が行われた。百済と新羅にも旧伽耶地域の領有をめぐる対立が生じた。

この頃、倭も、新羅に対する軍事的威嚇のため、二度にわたり、数万の軍を動員し筑紫まで出兵した。推古 15 年(607)、倭国は隋に外交使節として小野妹子らを派遣するが、東アジアの他の国々のように冊封体制に組み込まれることはなかった。

一方隋は、度重なる高句麗への遠征と、その敗退などによって国内が疲弊し、各地に反乱が勃発、618 年に滅亡し、代わって唐帝国が成立した。

唐が帝国を再建すると高句麗、百済、新羅は唐の冊封を受けたが、倭は、それまで同様、冊封を受けることはなかった。唐帝国の成立によって国際関係は一旦、安定したが、それも長くは続かなかった。

642 年、百済が新羅に侵攻し、旧伽耶地域の領土を奪回したことに端を発し、領土と城の争奪が繰り返された。唐は隋と同じく、高句麗遠征を繰り返したが、容易に制圧することはできなかった。新羅は、倭国や高句麗と結ぶ百済に対抗するため、唐に接近し同盟関係の確立に努めた。655 年、唐による高句麗遠征が再開され、これに前後して高句麗と百済は新羅に侵攻し、戦火は拡大していった。

このころ倭は百済の旧伽耶地域の領有を認める一方、唐服で来朝した新羅の使者を詰問するなど、一貫して親百済、反新羅の外交方針を堅持した。

新羅からの救援要請を受けた唐は、高句麗と同盟する百済を攻撃するために出兵した。660 年 3 月、唐将、蘇定方率いる 13 万の大軍が、海から錦江を遡って、百済の都扶餘にせまり、新羅軍 5 万は陸路、百済領に侵攻。唐、新羅軍により包囲された義慈王は 7 月 18 日降服し、百済は滅亡した。

しかし、唐と新羅軍は、百済領を全域にわたって制圧したわけではなく、唐が軍の主力を再び高句麗征討に向けると、鬼室福信ら百済の遺臣たちは国の復興を目指して各地で立ち上がった。

斉明 6 年(660) 10 月、百済の遺臣は倭に使者を送り、援軍の派遣と当時「質」として倭にいた百済の王子餘豊璋の送還を要請した。斉明女帝を首班とする倭政権は、これに応え百済救援軍の派遣を決定。同年 12 月には天皇自ら難波に行幸し、兵器の調達と造船を命じ、半島への派兵の準備を始めた。翌、斉明 7 年(661) 正月、斉明天皇は朝廷の主要メンバーとともに前線基地である筑紫に向けて難波津を船出した。

斉明天皇らは、3 月 25 日に筑紫の那津(博多湾)に到り、磐瀬行宮(福岡市)に入ったが、この間にも兵力の動員や、前線基地の設置などが急速に進められたものと考えられる。九州北部から瀬戸内海沿岸に分布する古代山城のなかには、このころ築造あるいは修築されたものもあると思われる。斉明天皇は 5 月 9 日に朝倉橋広庭宮に移り、ここを対外戦争の拠点としたが、同年 7 月 24 日に死去した。これ以降、中大兄皇子が皇太子のまま称制(即位せずに政務を執ること)し、唐、新羅との戦いの指揮をとることとなった。

天智元年(662) 8 月ないし 9 月、倭国朝廷は 5 千の兵とともに皇子豊璋を百済に送り届け、百済王に即位させた。こうして始まった百済復興支援戦争「百済の役」は、戦いの最終局面であるわずか 2 日間の「白村江の戦い」がクローズアップされがちであるが、実は 663 年 9 月第一次派兵から天智 2 年(663) 9 月の半島か

ら撤退まで、約1年にわたる長い戦いであった。

さて倭は663年3月、さらに2万7千人の大軍を朝鮮半島に送り、新羅に上陸させている。

このころ百済の上層部には結束の乱れが生じ、復興運動の主導者である鬼室福信が殺害された。こうした中、唐本国から増援部隊が派遣され、唐軍は新羅軍と合流し、8月17日、百済軍の拠点周留城を唐・新羅連合軍は包囲した。

倭は、天智2年(663)8月27日、新たに1万余の兵力からなる水軍を朝鮮半島南西部の白村江に送り、唐の水軍と、雌雄を決する戦いが行われた。2日にわたる戦いで、倭の水軍は兵船4百艘を焼かれ敗退した。統制のとれた唐の水軍に対し、国造軍の寄集めであったことが、倭軍の敗因ともいわれる。9月7日には周留城も陥落し、百済復興の夢はここに潰えた。百済の遺臣の多くは倭へ亡命することとなり、倭の派遣軍は多くの百済遺民をともない半島から撤退した。倭政権は、敗戦の翌年に、唐や新羅の侵攻に備え、防人(さきもり)や緊急連絡用の烽(とぶひ=のろし)を配備するとともに、大野城など『日本書紀』の天智紀に見える山城を築き、国土防衛体制の強化を図るとともに、中央集権国家体制の確立へと邁進していくこととなる。わが国の古代山城で築造時期を特定できるものは数少ないが、この7世紀の動乱の時代に相次いで築造されたものと考えられる。

日本の古代山城

わが国の古代山城は、『日本書紀』や『続日本紀』などの官選史書に記録が残る山城と、史書に記録を留めない山城がある。史書によって築造時期が分かる山城は数少なく、それ以外の多くの山城の築造時期や目的について議論が繰り返されてきた。史書での取り扱われ方から古代山城を大別すると以下のようなになる。

①史書に記述があり築造時期が明確な7世紀の城 (長門城・大野城・基肆城・高安城・屋嶋城・金田城)

長門城、大野城、基肆城は665年に、高安城、屋嶋城、金田城は667年に築かれたことが『日本書紀』の天智紀に記され、663年の白村江の戦いの敗戦にともない、唐・新羅軍の侵攻に備えて築かれたと考えられる。また築城には亡命百済官人が関与したことも知られる。大野城のような大規模なものもあり、内部に礎石建物を持つものも多い。但し、長門城は所在地不明である。

②史書に記述があり遺跡も特定されているが築城時期が不明な城 (鞠智城)

鞠智城は現在知られる最南端の古代山城で、大野城などの天智期山城と同時代の城と考えられている。城内に建物跡や貯水池跡が見つかっている。文献に修理の記事はあるが築城時期は記されていない。

③史書には登場するが遺跡が確認されていない城 (常城・茨城・三野城・稻積城・長門城)

常城、茨城、三野城、稻積城は修理と停廃記事のみで築造目的や築造時期は不明。常城、茨城は郡名の記載があり、おおよその位置は推定されるが、遺跡は未確認である。三野城、稻積城の所在地は諸説あるが特定できていない。665年に築かれたとされる長門城も、未だ所在不明である。

④記録が残されていない城 (鹿毛馬城・雷山城・杷木城・高良山城・女山城・帯隈山城・おつぼ山城・御所ヶ谷城・石城山城・唐原山城跡・阿志岐城・鬼ノ城・大廻小廻山城・播磨城山城・永納山城・讃岐城山城)

これらのうち、鹿毛馬・雷山・杷木・高良山・女山・帯隈山・おつぼ山・御所ヶ谷・石城山の9城が「神籠石」と名付けられた山城である。「神籠石」とは本来、神の降臨する磐座(いわくら)のことだが、たまたま、福岡県久留米市の高良山にある列石遺構がこの名で呼ばれたことに端を発し、山中に列石を巡らす同種の遺跡に付けられた名称である。神聖な場所を列石で区画したとする神域説が唱えられたこともあったが、

昭和 38 年から、佐賀県のおつぼ山神籠石や山口県の石城山神籠石などが発掘調査され、古代の山城であることが明らかになった。文献記録の無いこのグループの山城を一括して「神籠石式山城」あるいは「神籠石系山城」と呼ぶこともある。尚、本論では7世紀の山城を同一組上で論じる必要から、〇〇神籠石という名称を用いず、〇〇城という名称に統一した。

⑤新羅征討計画にともなう新しい城（怡土城）

吉備真備を専当官とし、756年に築城を開始、768年に完成した城。7世紀の古代山城とは築造の目的を異にし、構造にも差異が認められる。

このように史書での扱いはさまざまであるが、史書に記載がある城を「朝鮮式山城」、記録のない城を「神籠石系山城」とする分類には疑問を感じる。史書への記録の有無は偶然性にも左右され、いわゆる「神籠石系山城」も紛れもなく朝鮮半島の山城の影響下に築城された城であるからである。

古代山城の分布からみた国防計画

わが国の古代の山城はこれまで、対馬、北部九州、瀬戸内海沿岸と畿内に限って発見されている。こうした山城の配置は、大陸や朝鮮半島から倭国への侵攻想定ルートとオーバーラップする。唐や新羅軍が、わが国へ侵攻する際、開戦劈頭、難波津(大阪湾)に上陸し、王都である飛鳥京や大津宮へ進軍することは考え難い。いきなり倭国の中枢に攻め込んでも、地の利を得た守備軍に強力に反撃され、なにより、その後の本国からの補給が容易でない。倭に侵攻するのであれば、まず大陸や半島から最も近い対馬や壱岐を経て、北部九州を制圧しそこを橋頭堡として、畿内に向けて侵攻するのが戦術の定石であろう。古代の山城は、こうした侵攻ルートを想定して配置されたと考えられる。

大陸からの侵攻で参考になるのが、13世紀の蒙古襲来で、この時、モンゴル軍は対馬、壱岐を侵し、北部九州に上陸した。鎌倉幕府は、博多湾を中心に海岸線に防塁(石築地)を築き、水際で防ぐ戦術をとった。これを遡ること6百年余、倭政権は対馬、北部九州、瀬戸内海沿岸、畿内にわたる侵攻想定ルートに沿って山城を配置し、それらを連携させ、陸上交通路や港などを守り、敵の侵攻を阻もうとした。城の配置は元寇の時の様な水際での一線防御ではなく、最前線の対馬から王都のある近畿地方に至る、縦深防御体制が敷かれたことがわかる。とりわけ、敵の上陸が予想される北部九州には、綿密な防衛網が整備された。近畿より東側に山城が築かれていないのは、これらの城が、大陸、半島からの国土防衛を目的としたものだからである。

倭国の対外戦争の前線司令部として、初期には朝倉橘広庭宮が設けられ、後には大宰府がこれに代わった。北部九州の山城群の多くは、この2つの拠点を核として防衛網を形成したように見受けられる。九州で最も南に設置された鞠智城は、大宰府が陥落し、北部九州が制圧された場合に備え、大宰府に代わる新たな抵抗拠点として準備されたものであろう。

古代山城の構造

日本の古代山城は、朝鮮半島や中国東北部の山城を模範として築かれたもので、土や石で築いた城壁を山の中に巡らし、その中に兵士を駐屯させ、場合によっては周辺住民も収容し戦うことを想定している。飲料水を確保する必要から城内に水の流れる谷を取り込み、谷の水を城外に排水するため城壁に通水溝を備えることも共通する。

日本の山城には城内に兵舎や倉庫などの建物が確認される遺跡もあるが、これらが見当たらない山城も多い。城壁まで築いたものの、唐、新羅軍の侵攻の危機が去り、城内施設の整備までは行わなかった城もあったものと思われる。城壁すら完成せず、未完成に終わった山城も見受けられる。

城壁は、板で枠を設け、そこに種類の異なる土を積みながら棒でつき固めた版築土塁が多いが、石塁を多用する城もある。土塁の城も、水の流れる谷の部分は、通水溝を備えた石塁で遮断するものが多い。大野城のように周長6kmに及ぶものから小さなものでも2km近くあり、朝鮮半島には1kmに満たない山城が多いのに対して、わが国の山城は総じて規模が大きいのが特徴である。

日本の古代山城は、その文献記録の有無よりも立地や構造的差異に注目し、遺跡や遺物から、築城時期や技術の系譜を考えていかなければならない。

築城の時期と目的

7世紀の古代山城のうち、築城時期が史書から分かるのは6つの城だけであり、それ以外の山城が、いつ築かれたのかが古代山城の研究上の大きな課題となっている。

記録の残らない山城の築城時期を判断するには以下のような方法がある。

- ① 城から出土する遺物の形式から年代を検討する。
- ② 城から出土する資料で科学的に年代算定が可能なものを分析し時期決定する。
- ③ 木簡など築造時期を示す文字資料を発掘する。
- ④ 城の比較検討により、形態的、構造的特徴から新旧を検討する。

などである。

山城からの出土遺物は、7世紀後半に築城されていたことを示すものが多いが、詳細な時期を確定するまでには至らず、時期を示す出土遺物の無い山城も多い。それぞれの城の微妙な前後関係を判断するには、更に資料の蓄積が必要である。科学的年代測定の対象となる適当な資料や築造年代を示す文字資料は、未だほとんど発見されていない。

そこで、それぞれの城の比較検討が重要となる。665年と667年に築かれた山城は、それ以外の山城と比較して、防御機能に優れたものが多い。城としての防御力を最もよく示す城壁部分に着目すると、665年と667年に築かれた山城は4mから5mにおよぶ高い堅固な城壁を巡らせる。なかには城壁に雉(ち)と呼ばれる横矢を掛けるための張出しを設けたものもある。これに対し北部九州に分布する雷山城、鹿毛馬城、高良山城、女山城、杷木城、唐原山城、おつぼ山城、帯隈山城などは列石上の土塁の高さは3mに満たないものが多い。山城が軍事施設として時代とともに防御機能が進化すると仮定すると、そうした機能の劣る山城ほど古い時代に築かれたと推定することができる。同じ切石使用の山城でも御所ヶ谷城や石城山城のように高い城壁を持ち、両者の中間に位置するような城もある。また、文献に記載されない山城にも、岡山県の鬼ノ城のように角楼(雉)を備えた堅固な城壁を有し、高い防御力を備えた完成度の高い城がある。

こうした点から防御機能の面で劣る、雷山城、鹿毛馬城、高良山城、女山城、杷木城、唐原山城、おつぼ山城、帯隈山城などの切石列石を有する山城は、665年築城の大野城や667年築城の金田城と比べると、一段階古い山城と位置づけることができる。

しかし、見方を変えて石材加工技術に注目すると、「神籠石」タイプの山城には切石という先進的な技術が使用されていることから、この点に着目すれば、新旧が逆転することになる。つまり城のどこに着目するかで新旧の解釈が異なってしまうのである。

私は、古代山城の新旧を判断するには、防御機能の進化に着目すべきだと考えている。高い防御機能を備えた天智紀の山城や鬼ノ城が新しい山城で、切石列石を用いた、いわゆる神籠石スタイルの山城は、これらに先立つもので、白村江の敗戦以前に築城に着手された可能性が高いのではないかと推定している。

築造の目的については、中央政権が地方支配の拠点、あるいは示威装置として築いたとする見方もあるが、この種の山城が西日本に偏在することは、国外からの攻撃に備えることを第一義的目的としたもので、

7世紀の緊迫した国際情勢のなか、唐や新羅などの侵攻を想定し、山城による国土防衛網の構築を目指して相次いで築城されたものと考えられる。

いずれにしても、これらの古代山城は激動する東アジア世界の中で、国防と国家体制整備に邁進した当時の倭政権の強い意志を体現するとともに、「倭国」から「日本国」へと大きな飛躍を遂げる時代を象徴する遺跡であることは間違いない。

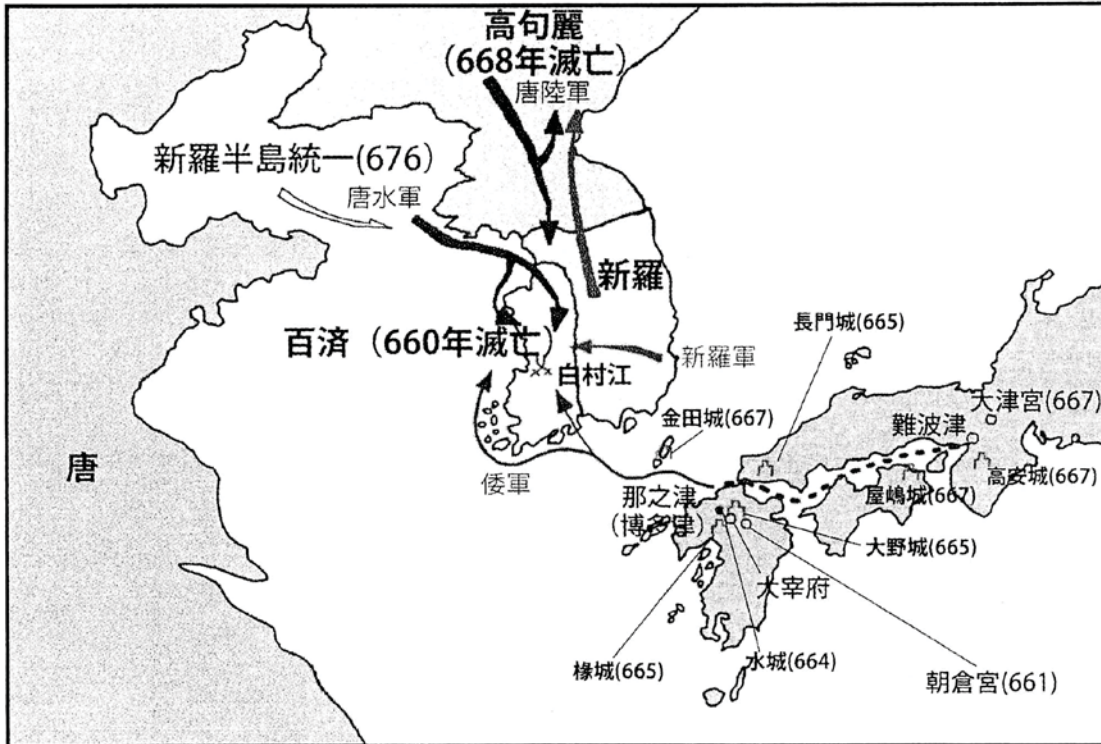


図1 7世紀後半の東アジア情勢

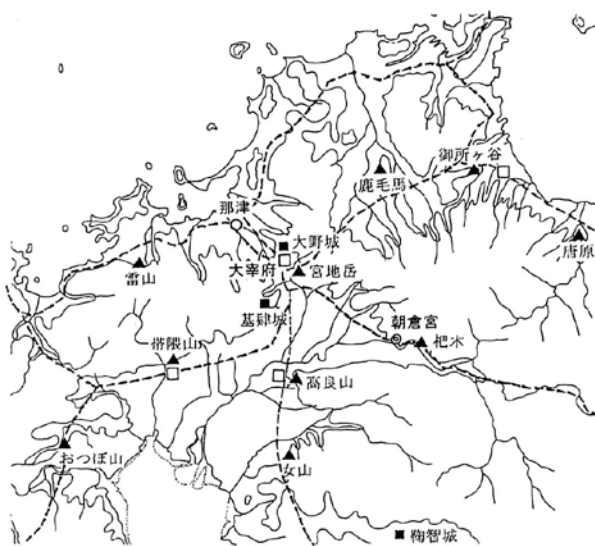


図2 北部九州の古代山城分布図
点線は官道(駅路)

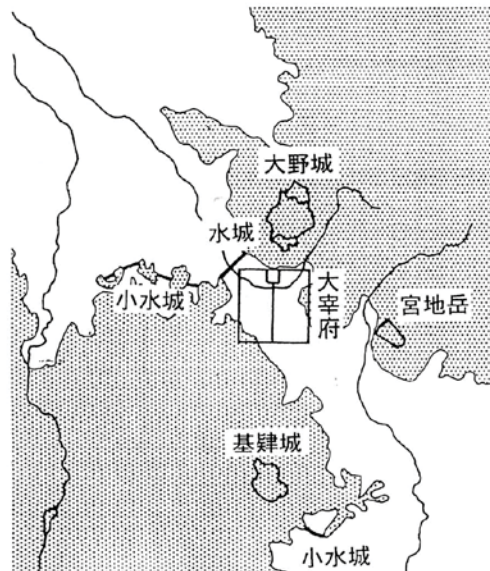


図3 大宰府周辺の古代山城

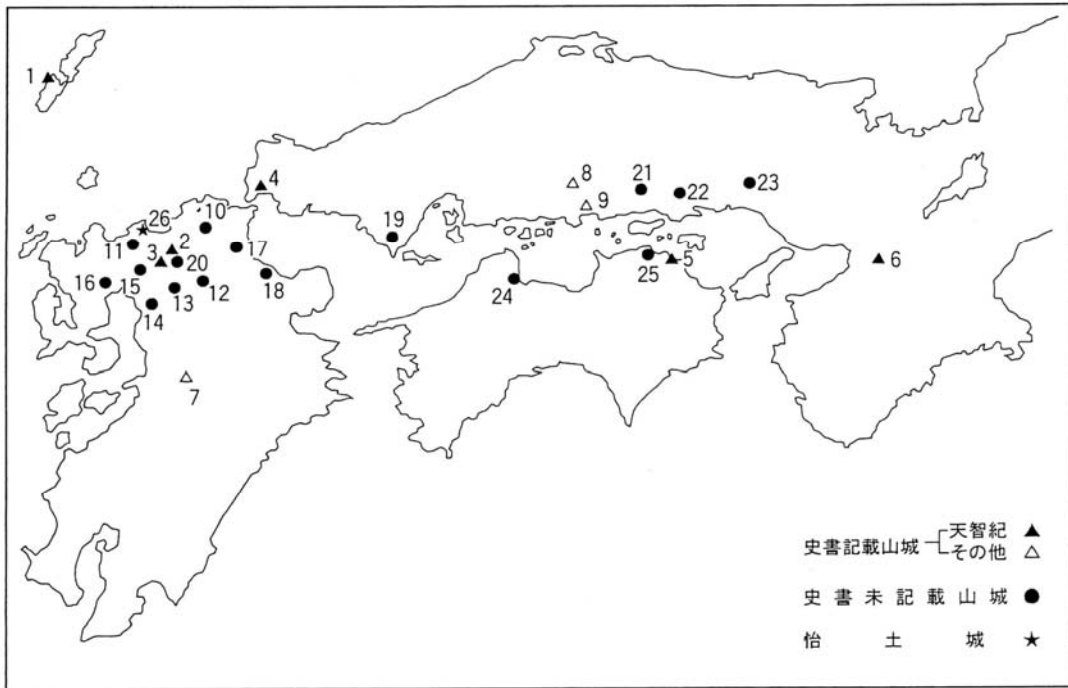
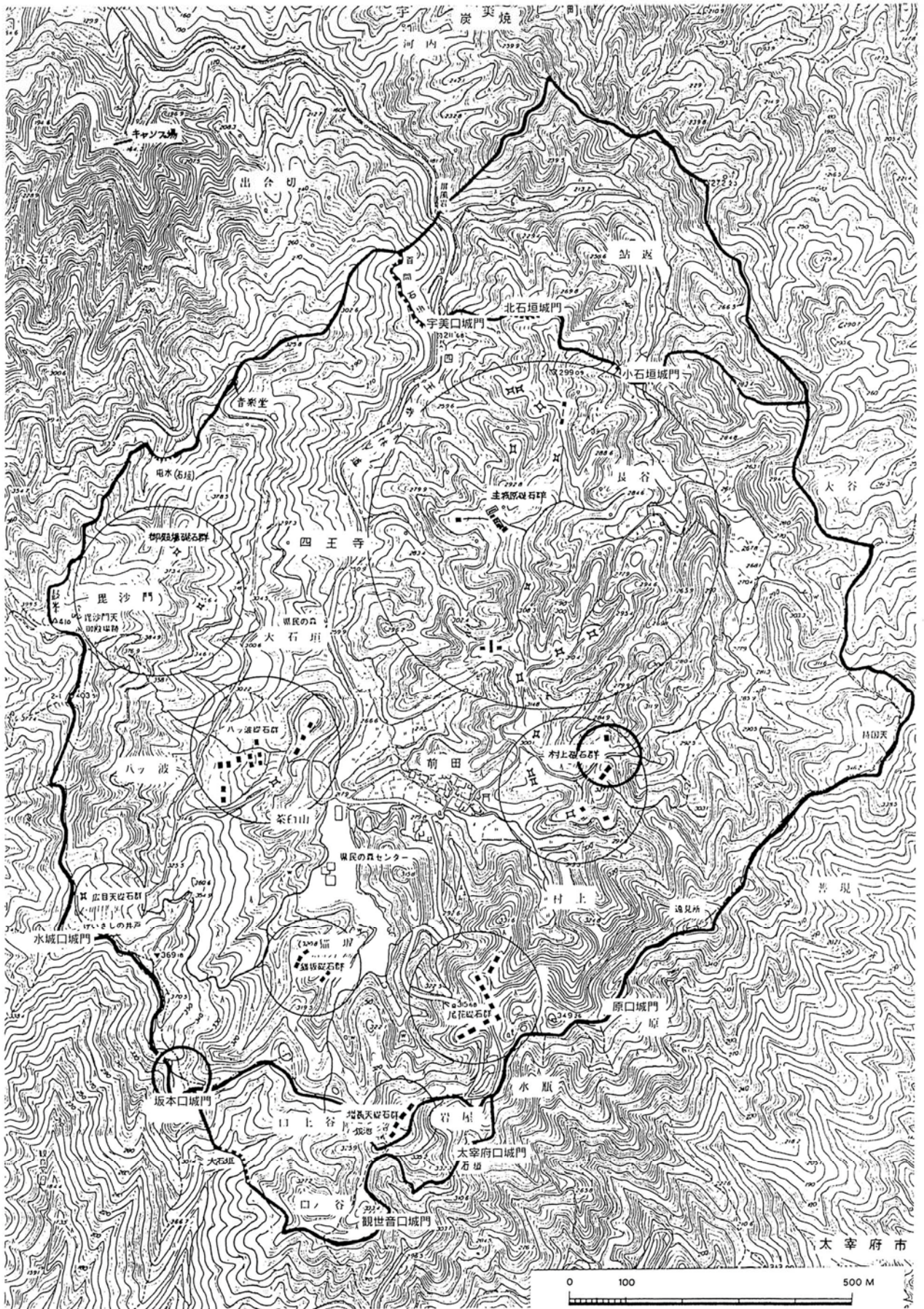


図4 古代山城分布図

城名	所在地	全周(km)	面積(ha)	城門数	建物	城壁の構造			
						高さ(m)	種別	版築	基底部の構造
1 金田城	長崎県対馬市美津島町	2.8	26.4	4	掘立	4~7	石塁		
2 大野城	福岡県太宰府市・宇美町ほか	6.0	181.4	8	掘立・礎石	4~8	土塁・一部石塁	有	割石・自然石
3 基肄城	佐賀県基山町・福岡県筑紫野市	3.9	62.9	4	礎石	4~7	土塁		
4 長門城*	山口県下関市周辺?						?		
5 屋嶋城	香川県高松市屋島町	7.0		1		2~6	土塁・石塁		
6 高安城	奈良県平群町・大阪府八尾市	?			礎石		?		
7 鞠智城	熊本県山鹿市・菊池市	3.5		3	掘立・礎石		土塁		
8 常城*	広島県芦品郡新市町?						?		
9 茨城*	広島県福山市蔵王町?						?		
10 鹿毛馬城	福岡県飯塚市	2.0	16.2			2~3	土塁未完?	有	切石露出
11 雷山城	福岡県糸島市	2.6	28.7				土塁未完?		切石露出
12 杷木城	福岡県朝倉市	2.25	24.9			2~3	土塁未完?		切石露出
13 高良山城	福岡県久留米市御井町	2.7	36.1			2~3	土塁		切石露出
14 女山城	福岡県みやま市	3.0	41.9	1		2~4	土塁	有	切石露出
15 帯隈山城	佐賀県佐賀市・神崎市	2.4	23.5	1		2~3	土塁	有	切石露出
16 おつぼ山城	佐賀県武雄市橘町	1.9	16.5	2		2~3	土塁	有	切石露出
17 御所ヶ谷城	福岡県行橋市・京都郡みやこ町	3.0	34.5	7	礎石?	3~5	土塁	有	切石埋没・一部列石無
18 唐原山城	福岡県築上郡上毛町	1.7	16.0	2	礎石?		土塁未完?		切石露出
19 石城山城	山口県光市	2.5	23.8	2		3~5	土塁	有	切石埋没
20 阿志岐城	福岡県筑紫野市阿志岐	2.4	16.35				土塁	?	切石段積・露出
21 鬼ノ城	岡山県総社市奥坂・黒尾	2.8	30.6	4	礎石	4~7	土塁・一部石塁	有	割石
22 大廻小廻山城	岡山県岡山市草ヶ部	3.2	38.6				土塁	有	切石埋没
23 播磨城山城	兵庫県龍野市揖西町			1	礎石	2~3	土塁・石塁		
24 永納山城	愛媛県西条市・今治市	2.5	24				土塁	有	割石埋没
25 讃岐城山城	香川県坂出市・丸亀市	6.3	168.2	1		2~3			
26 怡土城	福岡県糸島市	6.5		3	礎石	8	土塁	有	

*は所在未確認の山城

表1 古代山城一覧



大野城跡と城門跡(福岡県教育委員会 1983『特別史跡 大野城跡VI』第1図を一部改編)

図5 大野城 (1/10,000)



図6 鞠智城 (1/10,000)

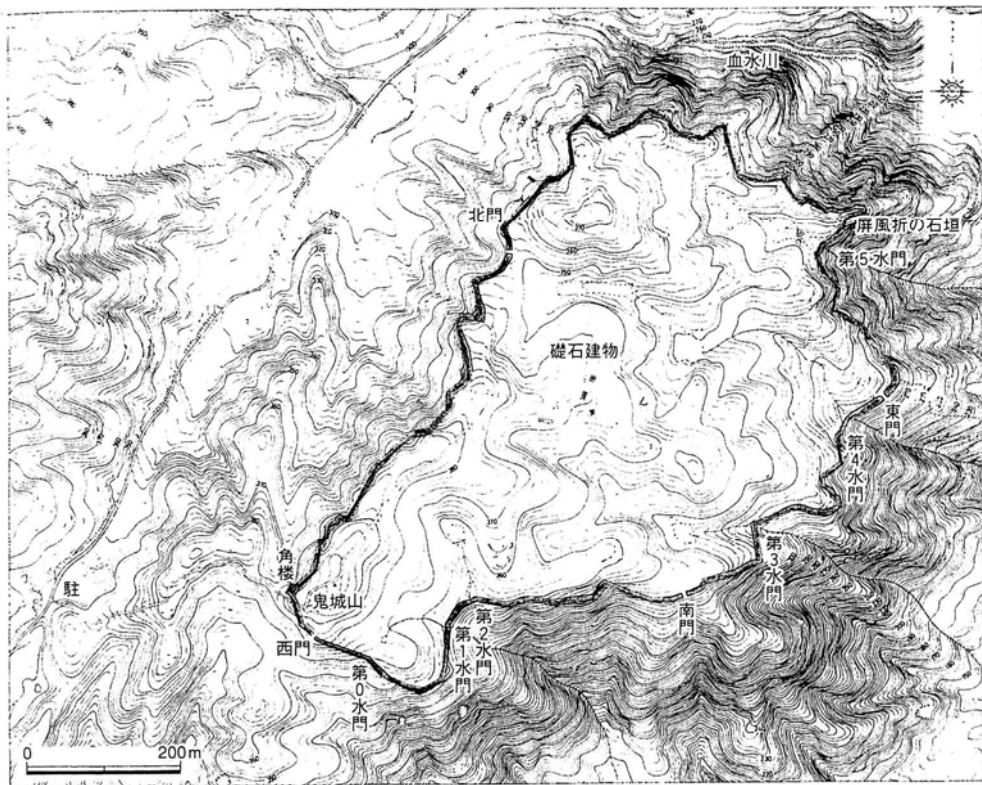


図7 鬼ノ城 (1/10,000)

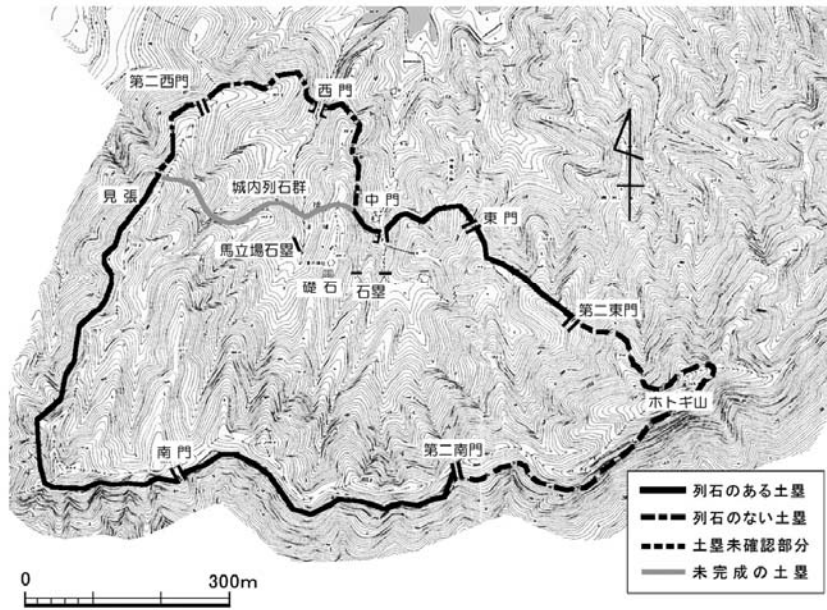


図8 御所ヶ谷城 (1/10,000)



図9 唐原山城 (1/10,000)

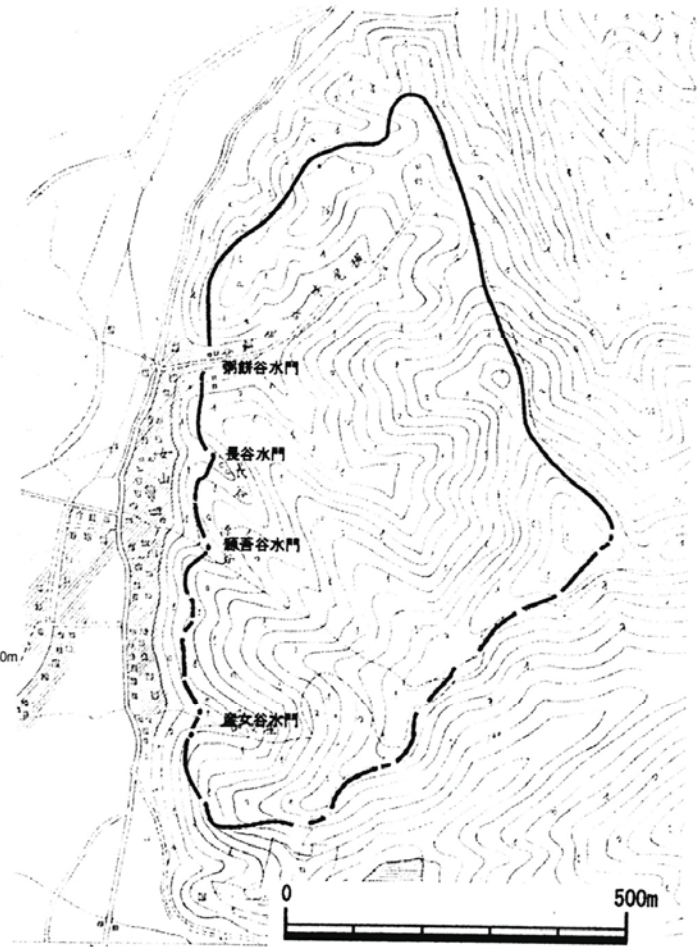


図10 女山城 (1/10,000)

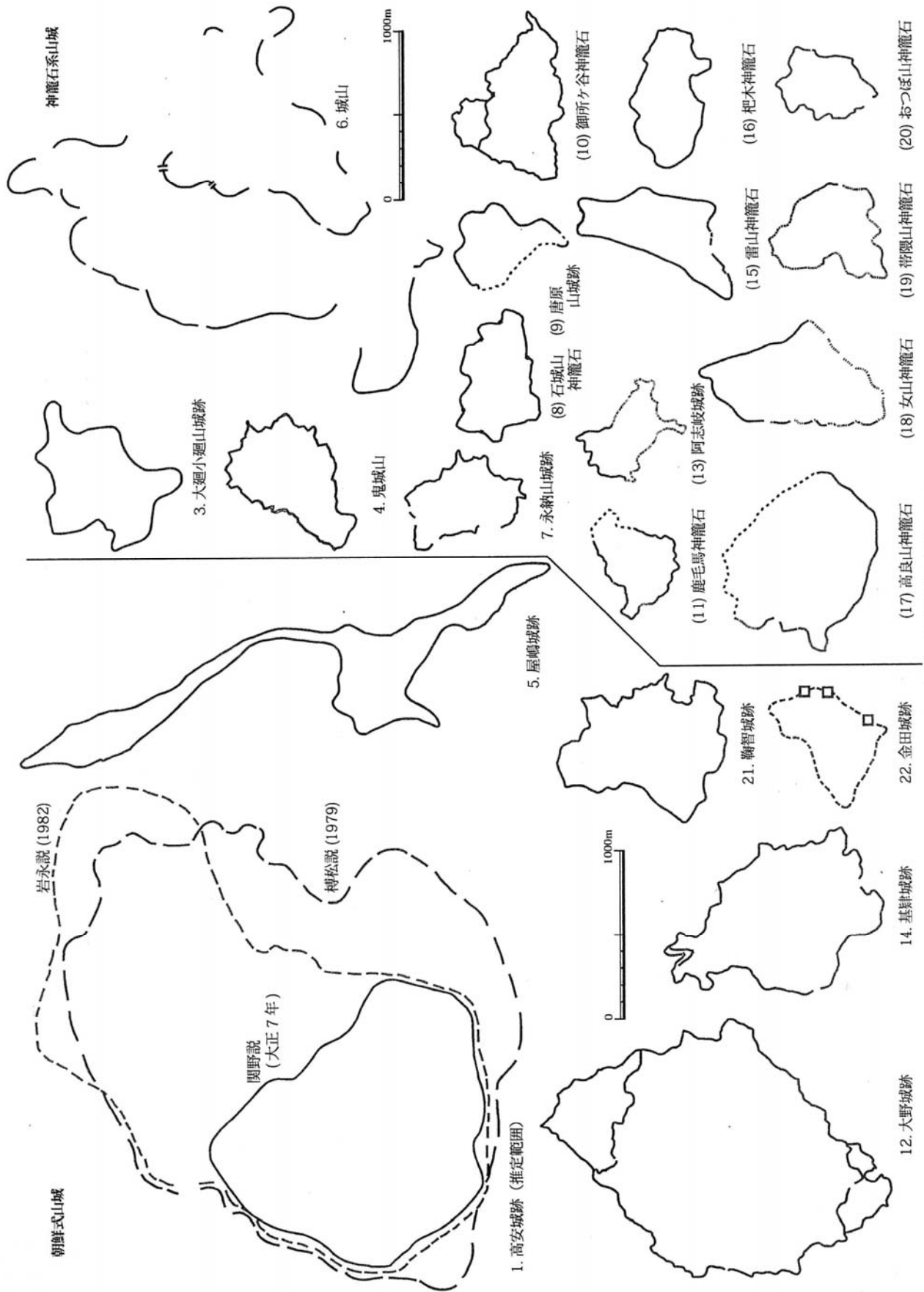


図 11 古代山城の規模比較 (1/30,000)

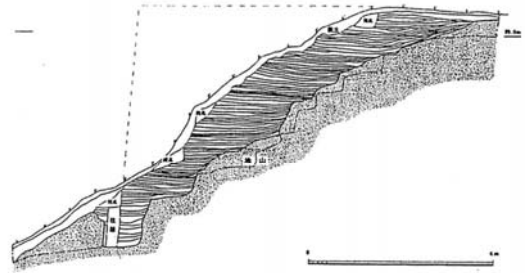
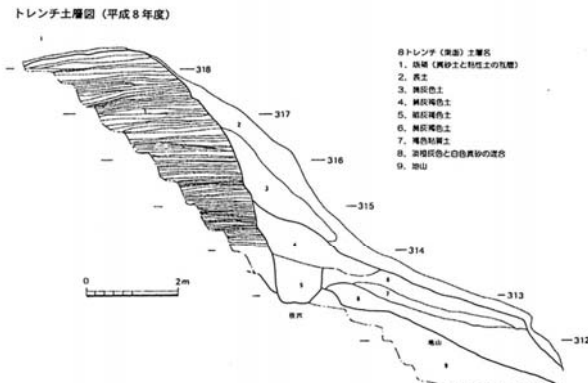


図 12 大野城大宰府口東方土塁断面図 (1/150)

図 13 御所ヶ谷城 B1 トレンチ土塁断面図 (1/150)

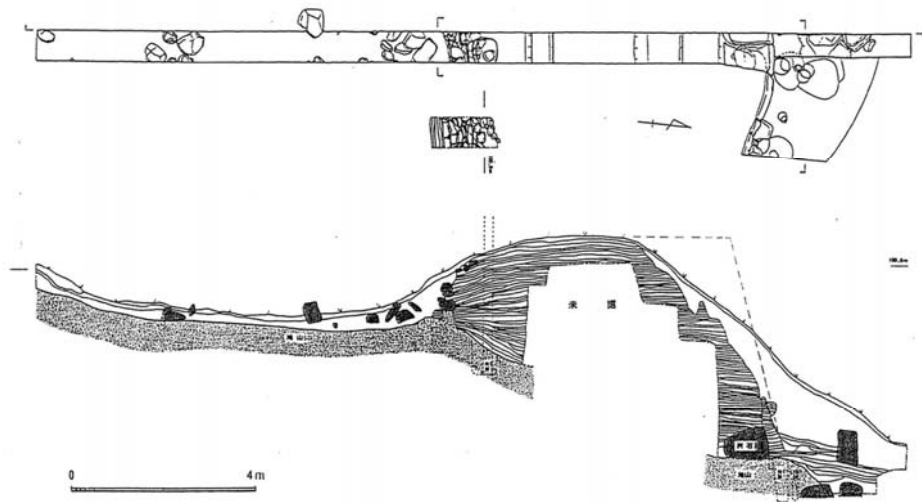


図 14 御所ヶ谷城 A2 トレンチ土塁平面図・断面図 (1/150)

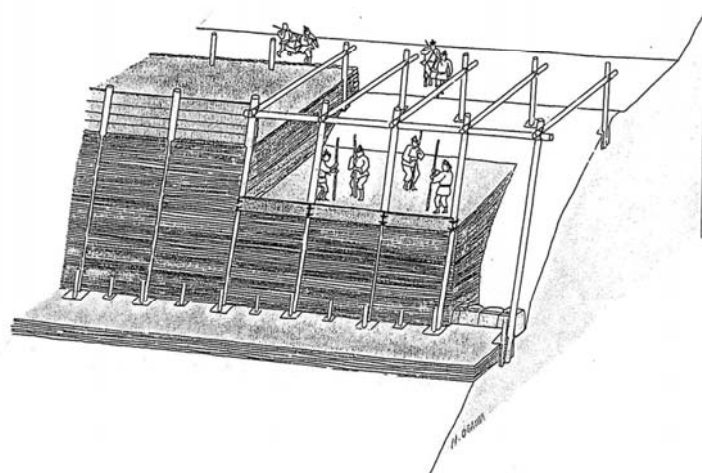


図 15 御所ヶ谷城土塁築造復原図



図 16 御所ヶ谷城 中門平面図・立面図 (1/150)



図 17 大野城大宰府口城門復原図

古代山城関係年表

591	崇峻4	11月	任那復興のため紀男麻呂、巨勢猿等を大将軍とし2万余の軍を筑紫に送る。	隋が中国を統一(589)
601	推古9	11月	新羅を征討することを議定する。	隋の高句麗遠征(598)
602	10	4月	撃新羅將軍來目皇子が筑紫に行き船を集め軍糧を運ぶ。	隋の高句麗遠征(612~614)
623	31		新羅が任那を討つ。	隋滅亡、唐建国(618)
645	大化1	6月	中大兄・中臣鎌足ら、宮中で蘇我入鹿を暗殺。	唐の高句麗遠征(644)
647	3		淳足柵を設ける。	唐の高句麗遠征(647)
648	4		磐舟柵を設ける。	唐の高句麗遠征(648)
658	4	4月	阿倍比羅夫、齶田・淳代の蝦夷を征討する。	唐の高句麗遠征(658)
659	5	3月	阿部比羅夫、船師180艘を率いて蝦夷を討つという。	
660	6	3月	阿部比羅夫、肅慎を討つ。	百濟滅亡(660)
		9月	百濟の使、新羅・唐軍の攻撃による百濟の滅亡を伝える。	
		10月	百濟の鬼室福信、救援と王子余豊璋の返還を要請する。	
		12月	齐明天皇、難波宮に移り、戦争を準備する。	
661	7	1月	天皇・中大兄皇子、百濟救援のため、西下す。伊予の熟田津に泊まる。	唐の高句麗遠征(661)
		3月	天皇・中大兄筑紫の那大津に至る。	
		5月	天皇、朝倉橋広庭宮に移る。	
		7月	齐明天皇、朝倉宮で没する。	
		9月	百濟王子豊璋に織冠を授け、5千余の兵とともに百濟に衛送する。	
663	2	3月	上毛野稚子ら、兵2万7千人を率いて新羅へ遣わされる。	
		8月	倭軍、白村江において唐水軍に敗退。豊璋は高句麗に逃亡する。	
		9月	倭軍、百濟の遺民とともに半島より撤退する。	
664	3		対馬・壱岐・筑紫などに、防人・烽を置き筑紫に水城を造る。	
665	4	8月	城を長門国に築かしむ。筑紫国に大野及び椽二城を築かしむ。	
		9月	唐使、劉徳高ら筑紫に来る。	
666	5		百濟人2千余人を東国に移す。	唐の高句麗遠征(666)
667	6	3月	近江大津宮に遷都	
		11月	大和の高安城、讃岐の屋嶋城、対馬の金田城を築く。	
668	7	1月	中大兄皇子が即位し、天智天皇となる。	唐により高句麗滅亡(668)
669	8	8月	高安城を修りて畿内の田租を収む。唐使郭務悰ら2千余人来るといふ。	
670	9	2月	高安城を修りて穀と塩を積む。	
672	天武1	6月	壬申の乱。大海人皇子、吉野を脱出して東国に向かう。	
		7月	大海人皇子の軍、大友皇子の近江軍を破る。	
673	2	2月	天武天皇即位。	唐、新羅に出兵(674)
675	4	2月	天皇高安城に幸す。	新羅、半島を統一(676)
679	8	11月	竜田山・大坂山に関を置き、難波宮に羅城を築く。	
689	持統3	9月	直廣參石上朝臣麿、直廣肆石川朝臣蟲名等を筑紫に遣わして位記を給送す。かつ新城を監う。	
		10月	天皇高安城に幸す。	
694	8	12月	藤原宮に遷都。	
698	文武2	5月	大宰府をして大野、基肆、鞠智の三城を繕治せしむ。	
		8月	高安城を修理む。	
699	3	9月	高安城を修理む。	
		12月	大宰府をして三野、稻積の二城を修らしむ。	
701	大宝1	11月	高安城を廢して、その舎屋雜儲の物を大倭、河内二國に移し貯う。	
702	2	10月	大宝律令を諸國に頒下する。	
710	和銅3	3月	平城に遷都する。	
712	5	1月	河内國高安の烽を廢めて、始めて高見の烽及び大倭國春日の烽をおく。	
719	養老3	12月	備後國安那郡の茨城、葦田郡の常城を停む。	
720	4	3月	隼人、反乱する。大伴旅人を征隼人持節大将軍に任ずる。	
756	天平勝宝8	6月	怡土城築城開始	
768	神護景雲2	2月	怡土城完成	

【講演 2】

「怡土城とその時代—吉備真備とその人間模様—」

糸島市教育委員会 瓜生 秀文

1 吉備真備

「怡土城」築城の最初の専任者である吉備真備は持統天皇9年(695)右衛士少尉を極官とする下級武官下道朝臣罔勝の子として生まれ、宝亀6年(775)10月2日に薨じた。享年83歳であった(薨伝では81歳)。薨伝の記載から推測すると老衰であろう。真備の一族は吉備地方(現岡山県)の地方豪族の出身であった。ただし、真備本人は畿内で出生したと考えられている。極官は右大臣であった。真備の一生は5期に分けてみる事ができる。

第1期は誕生(695)から霊亀2年(716)。この22年間は学問に精進した。下級武官の子でありながら遣唐留学生として抜擢され、入唐留学を命ぜられる。

第2期は養老元年(717)から天平7年(735)までの留学期間である。真備23歳から41歳。ここではその学問が極めて多方面に及んでいる。彼のもたらした漢籍の数量・内容がそれを物語る。

第3期は天平7年(735)から天平勝宝元年(749)まで。真備41歳から55歳。官位の昇進は目覚しい限りであり、玄昉と共に橘諸兄政権のブレーンとして活躍する。真備の最初の栄達時代であった。

第4期は真備の大宰府時代。56歳にして筑前守、続いて肥前守に左遷される。翌天平勝宝3年(751)には2度目の遣唐使任命。帰路は難破して漂流するが帰国。帰国後、大宰大貳へと昇進し、「怡土城」築城の専任者となる。この間の10年間は主として軍事方面にその才能を発揮するが、政敵藤原仲麻呂の、真備を京から遠ざけ大宰府から動けないようにする巧みな政略に屈する時期でもある。

第5期は参議・右大臣時代。70歳にして造東大寺長官に転じた真備は、恵美押勝(藤原仲麻呂)の乱に際して、その軍学用兵の妙を実地に試みて大成功を収める。72歳で右大臣。まさに遅咲きの大輪であった。

2 吉備真備と藤原仲麻呂

吉備真備は持統天皇9年(695)、右衛士少尉を極官とする下級武官下道朝臣罔勝の子として生まれる。一方、藤原仲麻呂は慶雲3年(706)、藤原武智麻呂の子として生まれる。地方出身の真備と中央で権力を掌握している藤原一族の仲麻呂。この生い立ちの対比的な2人は政治という舞台上で鎬を削ることになる。

吉備真備は僧玄昉とともに橘諸兄政権のブレーンであった。ところが橘諸兄政権が弱体化するとつぎに頭角をあらわしてくるのが、かつて中央政府を席卷していた藤原四子の一人の藤原武智麻呂の次男である仲麻呂であった。仲麻呂はまず僧玄昉を造観世音寺長官として筑紫に左遷する。結果として天平18年(746)、僧玄昉は観世音寺の落成式の際、藤原広嗣の亡霊(支持者)に暗殺される。つぎに仲麻呂は吉備真備も天平勝宝2年(750)に筑前守、さらには肥前守へと左遷する。仲麻呂は真備も僧玄昉と同じ運命にあわせようと考えたのであろう。しかし、真備はその危機をうまくかわす。さらに仲麻呂は真備を遠ざけるために天平勝宝3年(751)、遣唐副使として唐へ派遣する。真備は帰路で漂流はするものの、帰国する。思惑がはずれた仲麻呂は天平勝宝6年(754)、真備を大宰大貳に昇格させ、さらに「怡土城」築城の専当官に任命する。これは真備の軍事方面の才能を活用しつつ、真備を大宰府に釘付けにする巧みな政略であった。大宰府の10年間、真備は仲麻呂の巧みな政略に屈することになる。

ところがその後、藤原仲麻呂政権は弱体化し、天平宝字8年(764)、真備は造東大寺長官として帰京する。仲麻呂は同年、恵美押勝の乱(藤原仲麻呂の乱)を起こし、自滅するが、その背後で軍学用兵の妙を実地に試みて大成功を収めたのは、かつて仲麻呂によって辛酸をなめさせられた真備であった。

3 佐伯今毛人

佐伯今毛人は、右衛士督従五位下を極官とする佐伯人足の子であり、大蔵卿正四位下佐伯真守の弟である。名は初め若子、また今蝦夷にもつくり、「東大寺居士」と称せられた。養老3年(719)に生まれ、出仕の初めは舎人監舎人であった。天平16年(744)に成選し、翌年4月に従七位に叙せられた。この頃、優婆塞司にいたことが知られる。天平18年(746)には大養徳(大和)国少掾で従七位上。天平19年(747)7月には造寺司次官とみえるが、造東大寺司が整備されたのは天平20年(748)7月頃であり、天平20年9月の署には、造東大寺司次官兼大倭少掾で従七位上であった。天平21年(749)4月には六階を特授されて正六位上となり、天平勝宝元年(749)には大和介に昇任する。

佐伯今毛人と東大寺との関係は、墓伝によれば天平15年(743)以来のことらしい。天平勝宝元年12月に従五位下、天平勝宝2年(750)12月には正五位上に昇叙。これらの急速な昇階は、東大寺造営について、その働きが「幹勇」と称されるほどのものであり、その労に報いんとしたためであろう。また、仏教信仰に篤く、天平19年(747)から天平勝宝4年(752)の間に私経書写依頼の文書が残されている。

天平勝宝4年からは次官兼下総員外介とみえる。天平勝宝4年7月、太皇太后宮子崩御の折、造山司となり、以後も聖武太上天皇(天平勝宝8年・756)・光明皇太后(天平宝字4年・760)・称徳天皇(宝亀元年・770)崩御の際に山稜造営のことに従事している。天平勝宝7年(755)正月には造東大寺長官となり、のち天平宝字7年(763)・宝亀元年(770)と三度長官となっている。天平勝宝9歳(757)5月には従四位下に昇叙、天平宝字3年(759)11月には攝津大夫に転じている。

天平宝字7年(763)、時の権力者藤原朝臣仲麻呂(恵美押勝)暗殺の謀議に関与したが、藤原朝臣良継(宿奈麻呂)が責めを一身に負ったので、難を免れた。ただし、左遷の憂き目は免れず天平宝字8年(764)正月、宮城監に任ぜられ筑紫(九州)に赴き、天平宝字8年8月には肥前守を兼ねた。天平神護元年(765)3月、吉備真備と交代して築怡土城専知官となる。時に本官は大宰大貳。のち宝亀10年(779)と延暦5年(786)にも大宰大貳・大宰師として大宰府に赴いている。

天平神護3年(767)2月、造西大寺司長官に任ぜられて帰京。次いで神護景雲元年(767)8月、左大弁となり、神護景雲3年(769)3月には因幡守を兼ね、神護景雲3年4月に従四位上に進み、神護景雲4年(770)6月には兼播磨守となっている。宝亀2年(771)11月、光仁天皇踐祚に伴う大嘗会には大伴宿禰古慈斐とともに開門の役を果たした。宝亀6年(775)6月、遣唐大使に任命され、翌7年(776)4月に節刀を賜ったが、病のため渡唐しなかった。宝亀8年(777)10月には左大弁を辞している。宝亀10年(779)9月、大宰大貳に再任され、天応元年(781)4月には正四位上に昇った。天応元年6月、勅により左遷の員外師藤原朝臣浜成にかわって佐伯今毛人が専ら大宰府の政を執り行った。翌2年(782)4月、左大弁となり帰京する。

天応2年6月、大和守を兼ね、延暦3年(784)5月には長岡遷都のため現地の視察にあたり、延暦3年6月、藤原朝臣種継らとともに造長岡京使に任ぜられた。そして延暦3年12月、ついに佐伯氏では先後に例がない参議に昇った。延暦4年(785)5月、赤雀の祥瑞について奏上し、出瑞により延暦4年6月には正三位が授けられ、延暦4年7月には民部卿となる。延暦5年(786)4月、大宰師となり、在任すること3年、延暦8年(789)正月、齢70になったので、致仕を願い出て許された。

なお、これより以前、宝亀7年(776)に起工し、兄真守とともに進めてきた氏寺たる佐伯院(香積寺)伽藍(平城左京五条六坊)は、佐伯今毛人の生存中に完成をみたようである。延暦9年(790)10月、72歳で薨去した。死因は老衰であったと推測される。

4 佐伯今毛人と藤原仲麻呂

佐伯今毛人は養老3年(719)、右衛士督従五位下を極官とする佐伯人足の子として生まれる。一方、藤原仲麻呂は慶雲3年(706)、時の権力者藤原武智麻呂の子として生まれる。名門大伴氏の支流であり、古来、

大伴氏と並び称された武門佐伯氏出身の今毛人とかたや中央で権力を掌握している藤原一族の仲麻呂。この新旧名門出身の2人は政治という舞台で鎬を削ることになる。

天平感宝元年(天平勝宝元年・749)に聖武天皇が譲位し、皇太后である光明皇后が政治の実権を掌握すると、藤原仲麻呂の権力は急激に増大する。天平勝宝元年9月には、皇后宮職を発展解消して紫微中台を設置し、自らその令(長官)となり、中衛大将を兼ね、左大臣橘諸兄や兄である右大臣藤原豊成が主座となっている太政官を骨抜きにしようとかかったのである。そして、天平勝宝4年(752)4月、孝謙天皇が大仏開眼会をすませたのち、仲麻呂の田村第に行幸し、これを在所としたことで、藤原仲麻呂の勢力が決定的となったのである。

仲麻呂の急激な昇進と強大な権勢は、中央貴族の間に、おのずから彼に追従する一派と、反感をいまく一派とを生ぜしめた。天平勝宝4年頃からこのような政治的対立はさらに激化することになるが、佐伯今毛人に関しては、その実直な人柄からいっても、この陰悪な気流には巻き込まれず、ひたすら東大寺の造営に励んでいたと考えられ、藤原仲麻呂と佐伯今毛人との関係は東大寺造営を介して天平勝宝8歳(756)頃まではむしろ円滑であったと考えられている。

その藤原仲麻呂と佐伯今毛人との関係を一転させる大事件がおこる。それが天平宝字7年(763)3月に起こる「藤原良継の変」であった。天平宝字元年(757)頃からの仲麻呂の政策は新奇をてらい、私欲に出たものが多く、良識者の眉をひそめさせるものばかりであった。天平宝字4年(760)5月、大伴上足は「災事十条」を記して仲麻呂政権を弾劾しようとするが、弟の大伴矢代に密告され、計画は失敗におわり、大伴上足本人は種子島に左遷される。これより先に、孝謙太上天皇が平城京の北手に楊梅宮を造営するが、仲麻呂はその宮の南に自分の邸宅を造ったのである。この邸宅には、東西に高楼があり、南の正面には楼門が建てられた。この楼門からは、平城宮の内裏が丸見えであった。貴族たちはこれをもって不臣の行為と思ったらしいが、中でも憤慨したのは大伴家持・石上宅嗣・藤原宿奈麻呂、そして佐伯今毛人であった。なかでも石上宅嗣は図書館(芸亭)の創設者として有名であるが、彼のように温厚な知識人が激怒したのであるから、仲麻呂の専横は末期的現象を呈していたに違いない。『続日本紀』(宝龜8年9月18日条)によると、藤原宿奈麻呂(後に良継と改名)が中心となり、今毛人・家持・宅嗣をさそい、彼らの間で仲麻呂を暗殺する密謀が議された。ところが、どういうわけか、この密謀は外に漏れ、右大舎人の弓削男広は、これを仲麻呂に密告した。そこで仲麻呂は、早速、彼ら4人を捕縛し、糾問させた。今毛人・家持・宅嗣は、あくまでも密謀を否認したが、宿奈麻呂は「宿奈麻呂ひとり謀首たり、他人はかつて預かり知らず」と明言し、3人をかばった。そこで仲麻呂は宿奈麻呂の姓と位階を奪い、蟄居させる。

宿奈麻呂の毅然とした態度によって、今毛人・家持・宅嗣の三人は、あやうく虎口を脱れ、無事釈放されたものの、左遷の憂き目は免れず天平宝字8年(764)正月、家持は薩摩守、宅嗣は大宰少貳、そして、今毛人は宮城監に任ぜられ筑紫(九州)に追放される。ただし、仲麻呂は彼ら三人を野放しにしたのではなく、腹心の佐伯今毛人を大宰大貳に補し、彼ら三人と大宰員外師(前右大臣)藤原豊成とを監視させたのであった。なかでも今毛人に関しては天平宝字8年8月には肥前守を兼ねさせる。これはかつて吉備真備に対して実施した人事と同じであり、仲麻呂は今毛人が筑紫で暗殺されることを望んでいたのかもしれない。しかし、この正月の異動で仲麻呂は、かつて橘諸兄政権におけるブレーンの一人であり、彼が最も恐れていた吉備真備を、造東大寺長官に任じて入京させる。このことは仲麻呂派にとって大きな過因となった。

天平宝字8年9月11日、ついに仲麻呂政権にも運命の日が来る。藤原蔵下麻呂が討賊将軍に任命され、吉備真備が軍師として起用され、彼の作戦によって追討戦が開始される。やがて仲麻呂は鬼江の砂洲で悲惨な最期をとげ、仲麻呂政権は崩壊してしまう。

5 築城秘話

(1) 吉備真備・佐伯今毛人と西海道出身防人

「怡土城」の築城を開始した3年後の天平宝字3年(759)3月、吉備真備は大宰府防衛の不安4ヶ条を中央政府に奏上する(『続日本紀』)。そのなかで第2条と第3条は「防人」に関するものであった。

第2条は天平宝字元年(757)8月 27 日の勅にもとづく「東国防人」の廃止による防衛上の不安を訴え、さらに「東国防人」の復活を望んでいる。第3条は、天平宝字元年に廃止された「東国防人」のかわりに新しく差し遣わされた、西海道(九州)出身の兵士で編成された「防人」を「怡土城」の築城に従事させたいという内容であった。特に、第3条は当時の防人の規定になかったために、大宰府の官人達の反対を押し切ってまでもあえて奏上している。

そもそも「防人」は大化改新の詔にその記述を確認できるが、実際に制度化され充実していくのは天智3年(664)の白村江の敗戦後と考えられている。はじめは諸国から出されたようであるが、天平2年(730)を境に東国出身の兵に切替えている。その後、運営が困難になったため、次第に筑紫(九州)出身の兵に代えられるが、東国出身の兵に固執する傾向にあった。

この理由の一つとして、東国の地は早くから大和政権に掌握され、その軍事的・経済的基盤となっていた。それに対して筑紫(九州)の豪族は、筑紫君磐井に代表されるように反公権力的エネルギーを強く温存する特徴があって、東国の中央権力への従属度に比べると大きな差があった。筑紫へ左遷された吉備真備も、天平12年(740)に乱を起こした藤原広嗣を支持し、刑死後も彼のために「知識寺」を建立する筑紫の豪族の反公権力的な特質を、筑前守・肥前守のときに体験したのであろう。そのために吉備真備は、西海道出身の兵士で編成された「防人」を最前線に配置しないであえて「怡土城」の築城に従事させ、その一方で「東国防人」の復活を熱望したと理解できる。

「怡土城」築城を吉備真備と途中で交代した佐伯今毛人も、「防人」については東国出身の兵に固執する傾向にあり、天平神護2年(766)4月に太政官に進言し、さきに廃止された東国出身の防人の復活を請い、勅許を得ている。この進言の背後には、吉備真備と同様に「肥前守」の際、筑紫(九州)の反公権力的エネルギーを強く温存する特質の体験があるのであろう。そして、天平神護2年4月、佐伯今毛人より進言された東国出身の防人の復活を時の中央政府の参議として許可したのが、最初に「怡土城」築城を専任した吉備真備であった。

(2) 吉備真備と佐伯今毛人

吉備真備と佐伯今毛人との関係を直接説明する史料の存在は現時点において確認されていない。しかし、吉備真備に比べると、佐伯今毛人に関する史料のほうが比較的良好に揃っているため、ここでは佐伯今毛人に関する史料を基に両者の関係について考察したい。

まず、佐伯今毛人の父親である佐伯人足と吉備真備とに接点が認められる。佐伯人足は右衛士督従五位下を極官として政界を引退したのであるが、その後任として就任するのが吉備真備であった。吉備真備は天平7年(735)、唐より帰国し、大学助(正六位下)から中宮亮(従五位上)へと昇格し、そして天平10年(738)には右衛士督の任にあった。これから推測すると、佐伯人足は天平9年(737)まで右衛士督であったのか、あるいは天平9年の疫病によって卒去したかのいずれかであったであろう。ここで佐伯今毛人を人足の30歳の時の子と仮定し、そして人足が天平9年の疫病によって卒去したとすると、人足は48歳で卒したことになる。人足の嫡子(正腹の子)である今毛人は、20歳を前にして父人足の死に遭ったと考えられる。

佐伯今毛人には佐伯真守という兄がいた。この佐伯真守もなかなかの人物であり、後には大蔵卿(正四位上)まで昇進している。天平宝字7年(763)3月に起こる「藤原良継の変」で佐伯今毛人は筑紫(九州)に左遷されるのであるが、翌天平宝字8年(764)、兄の真守は正六位上で都にいた。おそらく真守は、父の人足と同じコースをとって衛府の武官であったと考えられている。その真守が天平宝字8年に造東大寺司

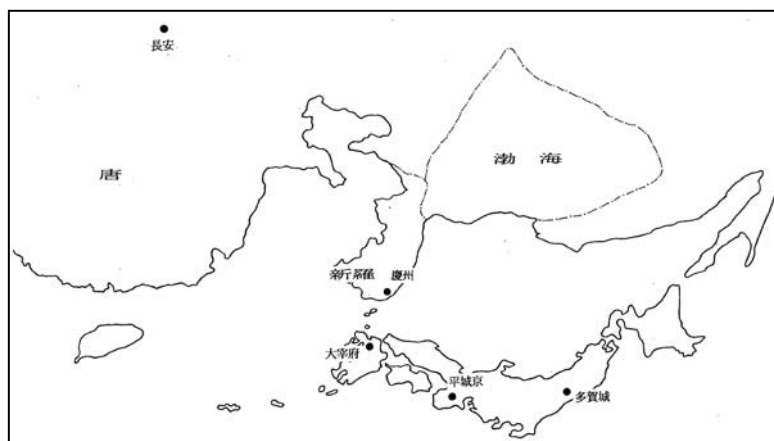
の判官に転じるのである。時の造東大寺長官は大宰府から帰京した吉備真備。この異動の背後には、吉備真備の運動があったと考えられる。真守は吉備真備の秘書官のような仕事も担当していたのであろう。そして、吉備真備は、造東大寺司が管理する正倉院は類のない宝庫であるのと同時に、重要な兵庫(兵器倉庫)であることも知悉していた。次官の国中連公麻呂は時勢には超然としていたため、真守は、判官の美努連奥麻呂と気脈を通じ、他日を期していたと考えられる。そしてついに仲麻呂政権にも、運命の日が来る。それは、天平宝字8年9月11日のことであった。吉備真備が軍師として起用され、彼の作戦によって仲麻呂派への追討戦が開始される。軍兵の動員と同時に、吉備真備は太上天皇の命令として法師安寛を正倉院に派遣し、佐伯真守と美努連奥麻呂の両判官立合いのもとに、大刀88振・弓103張・甲冑100領・矢筒96具などを取り出しており、その武具を造東大寺司に働いていた工匠や役夫に着装させたと考えられている。その追討軍のなかには佐伯今毛人の息子の佐伯三野が含まれ、父親の無念を晴らすべく奮戦した。佐伯三野他の奮戦の結果により、仲麻呂派は敗北し、仲麻呂本人は鬼江の砂洲で悲惨な最期をとげた。

仲麻呂の乱後、息子の佐伯三野、兄の佐伯真守は乱を鎮圧した功績により、それぞれ従五位上、従五位下を授けられる。大宰府にあって今毛人はわが子と兄の昇進を心から喜んだことであろう。その今毛人本人であるが、大宰府に在職中もっぱら力を注いだのが築城や軍士の配置であった。すでに新羅征討計画は、仲麻呂政権崩壊と共に立ち消えになってはいたものの、大宰府としては新羅に対して防備を充分にしておく必要があった。その一環として今毛人は天平神護2年(766)4月に太政官に進言し、さきに廃止された東国出身の防人の復活を請う。結果として、勅許を得ることになるが、その背後には、時の中央政府の参議であり、最初に「怡土城」築城を専任した吉備真備の姿があったのである。

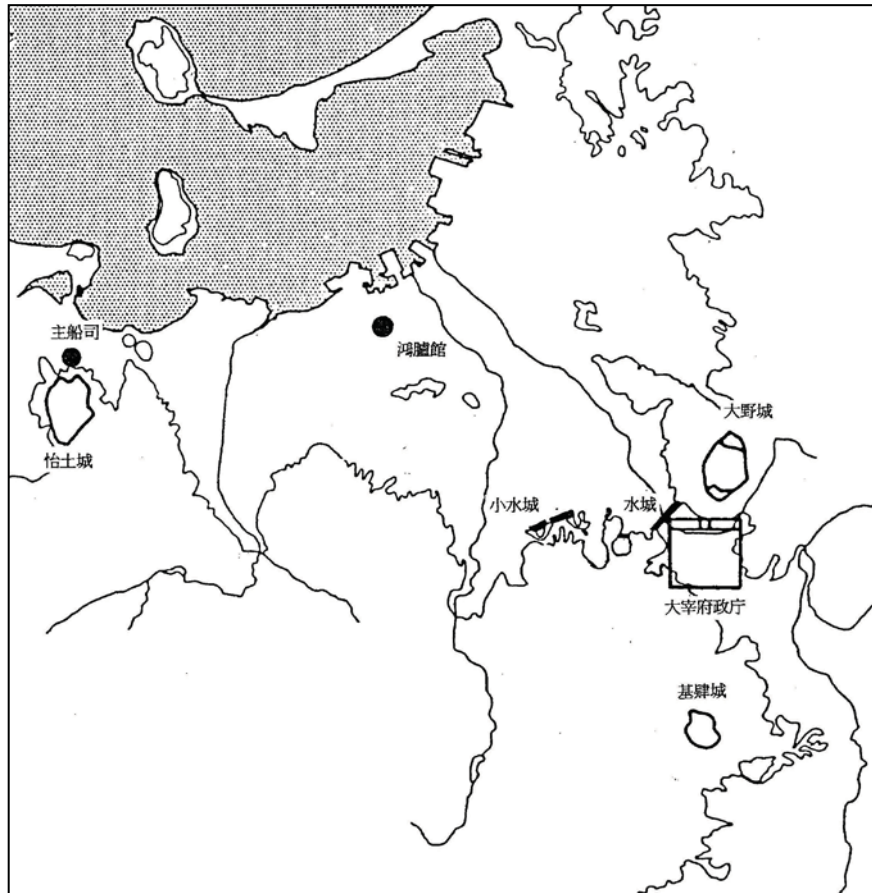
以上、吉備真備と佐伯今毛人との関係を直接説明する史料は確認できないが、佐伯今毛人の父親の人足、兄の真守、そして息子の三野をも通じて、吉備真備と佐伯今毛人の両者は何らかの接点をもっていたと考える。推測の域を出ないが、特に、仲麻呂の乱前後において、事を成就させるため都と大宰府との情報交換は吉備真備と佐伯今毛人のみならず、真守・三野も巻き込んで慎重かつ綿密に行われていたのではなかろうか。今後さらなる史料の蓄積を待ってこのテーマについては再考したいと思う。

参考文献

- 野村忠夫『古代官僚の世界—その構造と勤務評定・昇進—』(塙新書第28・塙書房・1969年)
- 長 洋一「藤原広嗣の怨霊 覚書」(『歴史評論』417・1985年)
- 岸 俊男『人物叢書 藤原仲麻呂』(吉川弘文館・1987年)
- 宮田俊彦『人物叢書 吉備真備』(吉川弘文館・1988年)
- 角田文衛『人物叢書 佐伯今毛人』(吉川弘文館・1988年)



8世紀の東アジア



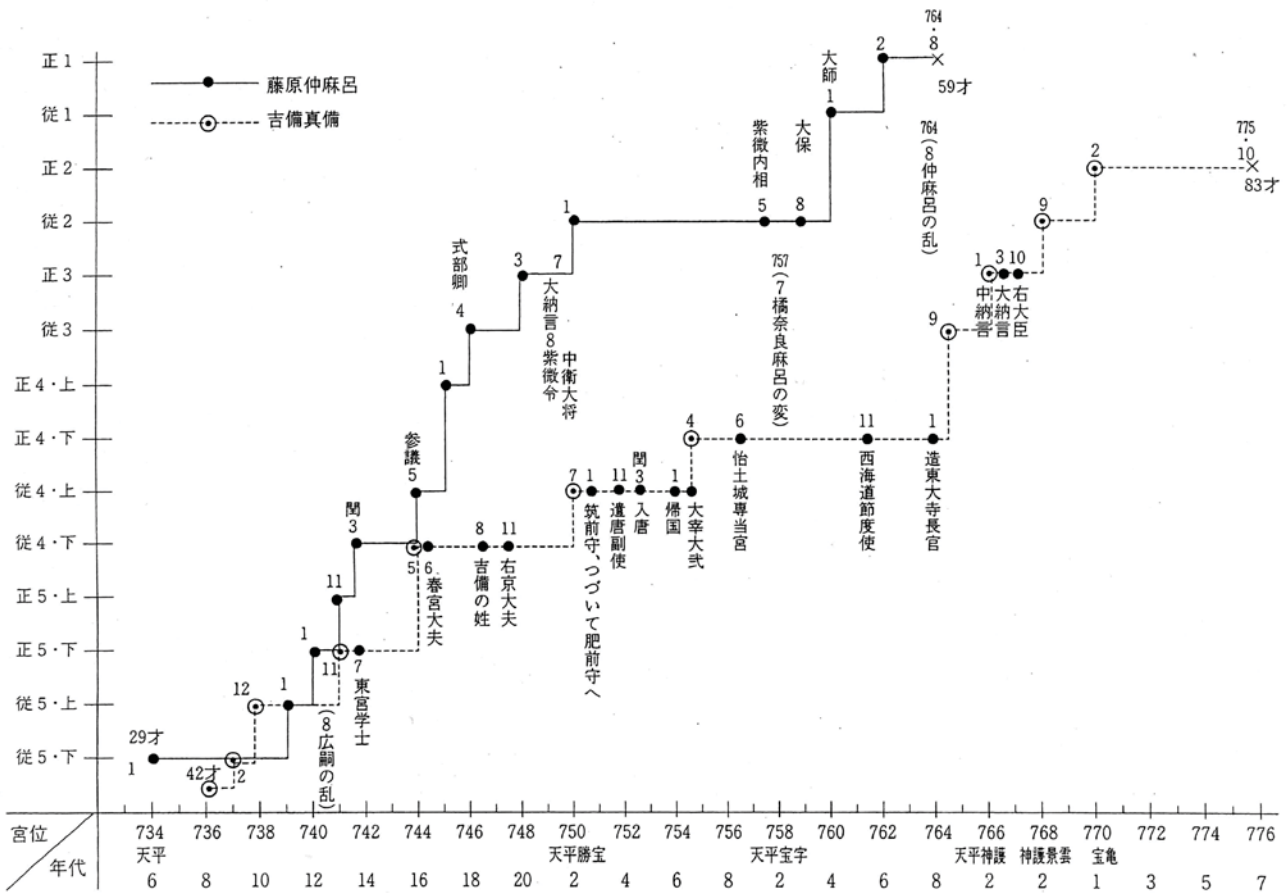
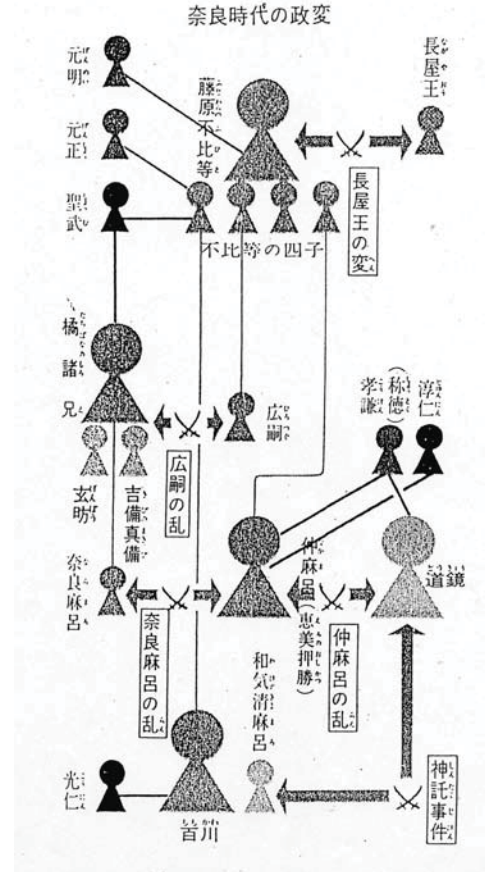
大宰府政庁を中心とした防衛プラン

怡土城跡 全体イメージ





吉備真備像



吉備真備と藤原仲麻呂

官人の群像

プロフィール

氏名	長屋王	山上憶良	肥君猪手
生年	684~729	660~?	649~
出自	天武天皇皇孫	渡来人or皇別氏族	旧国連系地方豪族
当該官職	左大臣 (724年時点)	筑前守 (726年時点)	嶋郡大領 (702年時点)
当該位階	正二位	従五位下	正八位上
当該勲位			勲十等
当該年齢	41歳	6歳	53歳
職歴	宮内卿 (709・26歳) 式部卿 (710・27歳) 大納言 (718・35歳) 右大臣 (721・38歳) 左大臣 (724・41歳)	遠唐少録 (701・41歳) 伯耆守 (716・56歳) 筑前守 (726頃・66歳)	嶋郡大領 (702・53歳)
出身	藤位により正四位上 職田30町、職野2000戸 資入200人	無位無姓で遠唐少録	
官職に伴う収入	位田60町、位野200人 資入80人	なし	職田6町
位階に伴う収入		位田8町、資入20人	なし
備考	714年、野100戸支給 729年、長屋王の妾	721年、東宮に侍する 万葉歌人	全戸口数124名 (奴隷37) 口分田蒸額13町6反120歩

表① 藤位制

父の官位	嫡子	庶子	嫡孫	庶孫
皇親	從四位下			
親	從五位下			
貴	正六位上	正六位下	正六位上	正六位下
	從五位下	正六位上	從六位上	從六位下
	正六位上	從六位下	從六位下	正七位上
通	正七位上	從七位上		
	從七位上	從七位下		
貴	正八位上	從八位上		
	從八位上	從八位下		

表② 官人の勤務評定の選限

区分	養老令制	慶雲三年格制	対象ポスト
内長上	6年	4年	毎日勤務の中央官 例 中央の諸官庁・地方大宰府・諸国司などの四等官。
内分番	8年	6年	交替勤務の中央官 例 史生、兵衛、帳内、寮人、使部。散位六位以下など。
外長上	10年	8年	毎日勤務の地方官 例 郡司の四等官、軍団の大・少監、医師など。
外散位	12年	10年	地方の国衙に籍をおき、交替勤務する散位

表③ 勤務評定の点数と評価

獲得した善・最とマイナスイナス評価	点数	評価
四善プラス最	5	上上
四善	4	上中
三善プラス最	3	上下
三善	2	中上
二善	1	中中
一善一最		
一善最		
戦事粗ら理り、善・最閉めることなし	-1	中下
愛憎情に任せ、処断理に乖く	-2	下上
公に背きて私に向かい、職務廃闕す		下中
官に居て諂い許る、及び貪濁状あり		下下

主 船 司

「主船司」は『養老職員令』によると難波津と大宰府に設置されていたことがわかっている。兵部省の管轄下であり、官船の管理や民間の船の調査などの全国の船の管理をその職掌としていた。『養老職員令』によると大宰府にも「主船」が設置されていたことがわかり、大宰府と民間の船の修理をその職掌としている。現在、福岡県福岡市西区周船寺一帯に所在したと考えられている。

難波津の「主船司」は『大宝律令』の制定された8世紀初頭に設置されていたと考えられているが、大宰府の「主船」に関しては「古記」という注釈書に記載されており、「古記」の成立年代が天平10年（738）であることから、大宰府の「主船」は天平10年（738）までには設置されていたことがわかる。

『養老職員令』によると、「主船司」は「正一人、佑一人、令史一人、使部六人、直丁一人、船戸」という組織の官司であり、『養老官位令』には「主船正」＝正六位、「主船佑」＝「正八位」、「大宰主船」＝「正八位」、「主船令史」＝「大初位」となっている。

この『養老官位令』によると難波津の「主船司」の「正」＝長官は中国（大國・上國・中国・下國の第3等級國）の國守（守・佑・掾・目の第1等級官）の官位と同等である。大宰府の「主船司」の「正」＝長官は中国（大國・上國・中国・下國の第3等級國）の判官（「掾」＝守・佑・掾・目の第3等級官）の官位と同等であり、難波津の「主船司」の佑（正・佑の第2等級官）の官位とも同等である。以上からも、大宰府の「主船司」は地方の官衙としてはかなり重要視されていたことがわかる。

なお、大宰府の「主船司」は奈良時代においては『養老職員令』に定めていたように大宰府と民間の船の修理をその職掌としていたが、平安時代になると大宰府の「主船司」の許可なくしては当時の迎賓館であった「鴻臚館」に入館できなかったことがわかっている。このことから、平安時代になると大宰府と民間の船の修理の他、入國管理をも「主船司」の職掌として位置付けられていたことがわかる。

参考文献

井上光貞「日本律令の成立とその注釈書」（『律令』・日本思想大系・岩波書店・1976年）

田島 公「真如（高丘）親王一行の「入唐」の旅―「頭陀親王入唐略記」を読む―」（『歴史と地理』・502号・山川出版社・1997年）

〔大宝二年筑前国嶋郡川辺里戸籍〕

戸主 追正 八位上 勲十等 肥君猪手 年伍拾参歳 正丁 大領 課戸

庶母 宅蘇吉志 須弥豆壳 年陸拾伍歳 老女

妻 笏多奈壳 年伍拾貳歳 丁妻

妾 宅蘇吉志 橘壳 年肆拾漆歳 丁妾

妾 黒壳 年肆拾貳歳 丁妾

妾 刀自壳 年参拾伍歳 丁妾

男 肥君与呂志 年貳拾玖歳 正丁 嫡子

男 勲十等 肥君泥麻呂 年貳拾漆歳 正丁 妾の橘壳の男

男 肥君太哉 年貳拾参歳 正丁 嫡弟

男 肥君乎麻呂 年拾捌歳 小子

男 肥君久漏麻呂 年拾陸歳 小子

男 肥君夜惠麻呂 年拾伍歳 小子

上件三口 妾の橘壳の男

(中略)

女婢 久我泥壳 年拾陸歳

奴 許牟麻呂 年壹歳 久我泥壳の男

上件十口 戸主の奴婢

奴 神哭 年肆拾歳

女婢 久曾壳 年捌歳

(中略)

上件八口 戸主の母の奴婢

奴 弓取 年伍拾貳歳

男奴 度 年参歳

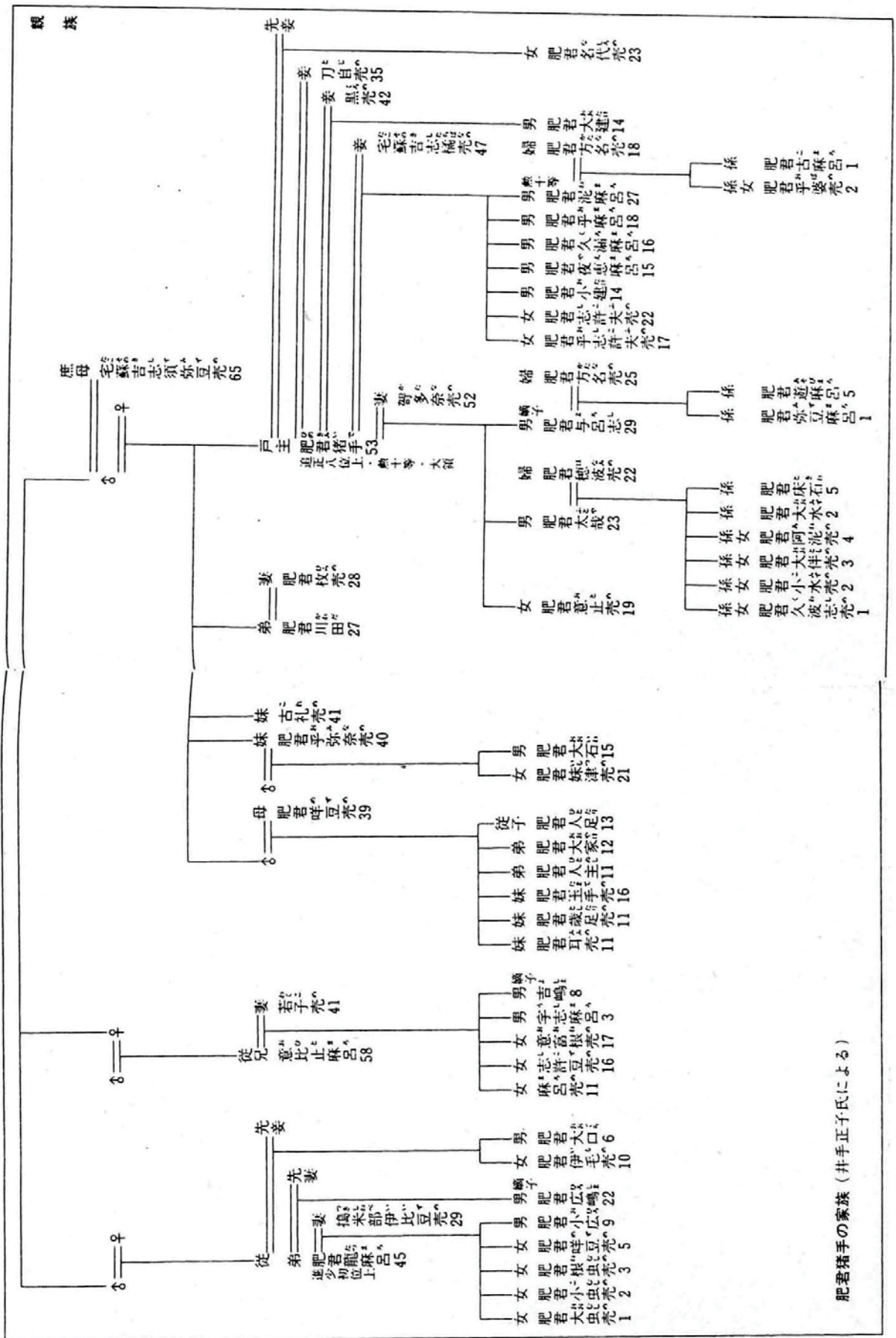
(中略)

上件十八口 戸主の私奴婢

(中略)

凡て口老伯貳拾肆 (中略)

受田老拾参町陸段老伯貳拾步



図表等出典一覧

「七世紀の国土防衛—古代山城の築城と背景—」 小川秀樹氏

- p.6 図1 行橋市歴史資料館編 『激動の7世紀 御所ヶ谷神籠石とその時代』平成20年度特別展図録 [行橋市教育委員会、2008年]
- p.6 図2～3 向井一雄 「日本の古代山城」九州国立博物館編『日韓の古代山城を掘る』[九州国立博物館]、2006年]
- p.7 図4 小川秀樹「御所ヶ谷神籠石と七世紀の国防」『行橋市史』上巻 [行橋市、2004年]
- p.7 表1 古代山城一覧 (小川秀樹 作成)
- p.8 図5 九州国立博物館『大野城と四王寺』文化交流展示室トピック展示図録 [九州国立博物館、2008年]
- p.9 図6 笹山晴生監修 熊本県教育委員会編『古代山城鞠智城を考える』[山川出版社、2010年]
- p.9 図7 『古代山城鬼ノ城』総社市埋蔵文化財発掘報告18 [総社市教育委員会、2005年]
- p.10 図8 小川秀樹「豊前・御所ヶ谷山城」『古代文化』62巻第2号 [2010年]
- p.10 図9 『唐原神籠石1』大平村文化財調査報告書 第13集 [大平村教育委員会、2003年]
- p.10 図10 『日本古代の山城』古代山城サミット基礎資料 [大野城市、2010年]
- p.11 図11 同上書
- p.12 図12 『特別史跡大野城跡整備事業』福岡県文化財調査報告書 第210集[福岡県教育委員会、2006年]
- p.12 図13～15 『史跡御所ヶ谷神籠石I』行橋市文化財調査報告書第33集 [行橋市教育委員会、2006年]
- p.13 図16 同上書
- p.13 図17 九州歴史資料館編『大宰府 発掘が語る遠の朝廷』[九州歴史資料館、1988年]
- p.14 古代山城年表 (小川秀樹 作成)

「怡土城とその時代—吉備真備とその人間模様—」 瓜生秀文氏

- p.19 8世紀の東アジア※
- p.20 大宰府政庁を中心とした防衛プラン※
- p.20 怡土城跡 全体イメージ※
- p.21 吉備真備像※
- p.21 奈良時代の政変 (瓜生秀文 作成)
- p.21 吉備真備と藤原仲麻呂※
- p.22 官位相当表 (瓜生秀文 作成)
- p.23 官人の群像 (瓜生秀文 作成)
- p.23 表①蔭位制 表②官人の勤務評定の選限 ③勤務評定の点数と評価 (瓜生秀文 作成)
- p.24 主船司 (瓜生秀文 作成)
- p.25 大宝二年筑前国嶋郡川辺里戸籍 (瓜生秀文 作成)
- p.26 肥君猪手の家族 (井手正子氏による) 青木和夫『日本の歴史5 古代豪族』[小学館、1974年]

※『国指定史跡怡土城跡』前原市文化財調査報告書 第94集 [前原市教育委員、2006年]

平成23年7月12日

第45回 福岡県地方史研究協議大会

編集兼発行 福岡県立図書館郷土資料課